
コイコイコイ

工藤真之介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コイコイコイ

【Nコード】

N7162Q

【作者名】

工藤真之介

【あらすじ】

三人の大学生による阿呆にまみれながらも全力で挑む恋愛模様を描いた短編。

夏祭りで催される『第十七回とうもろこし大食い大会』、大学へ行く途中に現れるという恋の神様、パパラッチをパパラッチする謎のパパラッチなど、どれも阿呆です。

ですが、彼らは全力です。

全力コメディ連載短編、どうぞご覧あれ。

とうもろこし大食い大会

『第十七回とうもろこし大食い王決定戦』の決勝戦まで勝ち進んだ僕は、これまで見たこともない最強の敵と戦っています。

僕はちらりと隣を見ました。腹岡さん^{はらおか}という大男が猛烈な勢いでとうもろこしを食べています。

僕も負けてはいられません。この戦いに勝利せねばならないのです！

僕は目の前の皿に盛られたとうもろこしの山に手を伸ばします。

「うおおおおおお。むしゃむしゃしゃ」と僕。

「ぐぼぐぼ。もしかもしゃしゃ」と腹岡さん。

僕と腹岡さんは互角の戦いを展開しています。

僕たち二人がとうもろこしを食べる様子を、会場の外のたくさんの観客達が見守っています。

夏祭りだからヨーヨーや綿飴を持ったお子ちゃまたちがたくさんいらっしやいますね。

夜になってから幾分涼しくなっただけなのですが、僕は暑くなる一方です。それは腹岡さんも同じらしく、気味の悪い男汗をだらだらと垂らしています。

一見すると腹岡さんのほうが圧倒的に優勢に見えます。それはもう観客の誰もがそう思うことでしょう。

なにせ腹岡さんに比べると、僕の体は小さいのです。いえ、腹岡さんとは比べなくても小さいのです。

僕の体は中学三年生の時に身長160センチに到達すると、そこが頂上だと思ったのか、それより上に一ミリも成長しませんでした。悲しすぎて涙なしでは語れません。

ですが僕はその見かけとは裏腹に、なかなかの大食い野郎なのです。しかも大学に入学し一人暮らしを始めてからは極貧生活を余儀なくされ、胃袋の中は常時すっからかん。縮んでしまったのではと

危惧したのですが、この『第十七回とうもろこし大食い王決定戦』に出場してみて安心しました。僕の胃袋は縮んでないかったです。それどころか、たるんで伸びてしまったのか前よりもたくさん食物を溜め込むことが可能になりました。

ですが安心してばかりもいません。

腹岡さん、只者ではないのです。

熊とゴリラを足して二で割らず足したままにしたようなその風貌は、まさに大食いで勝利するために生まれてきた男にしか見えません。

頭もでかいし顔もでかい、腕は丸太のように太く二の腕のお肉がプヨプヨしてます。顔には髭がびっしりと、腕には腕毛がびっしりと生え揃っています。身長もたぶん190センチはあるのではないでしょうか（座っているせいでよくわかりませんが）。

そして当然の帰結のように腹も白の中の餅のようにプヨンプヨンと巨大で柔らかそうです。

「ぐふふふっ、ニヤンダムは俺がいただくぜ。ぐふふふ」と腹岡さんが不吉な笑みを浮かべて言いました。

「そうはいきません。ニヤンダムは僕が勝ち取ります」

「チビが俺に勝てるわけないだろ」

「……今、なんと仰いましたか？」

「チビ」

「……」

「あれ、聞こえなかったのか？ ではもう一度。チービツ」

「貴様！ チビと言いやがったな！ チビにチビと言うとは許せん。この戦いに勝利した暁には、貴様を熊ゴリラ鍋にしてくれるわ！ そんな闇鍋、誰も食っちゃくれないぞっ。悲しいぞっ」

僕としたことが、つい怒っちゃいました。

「藤縄くーん。ふしなわ私のために頑張りなさいっ」

観客席から竜宮下さんが僕に向かって声を張り上げました。そうです。

僕は竜宮下さんのために、この戦いに勝たねばならないのです。

彼女のご命令とあらば

恥ずかしながら、僕と竜宮下さんはお付き合いをしております。かれこれ三ヶ月になりますでしょうか。

僕たちは同じ演劇部の部員で、竜宮下さんは僕の一つ上の先輩で大学三年生です。竜宮下さんは一言で言ってしまうと、とてもきれいな人です。背中に届くほど長い黒髪はツヤツヤでサラサラ、まるで流しそめんみたいです。目は透き通って黒目が大きくて、まるで艶のある黒豆みたいです。僕にはもったいない女性です。

実は僕たちのお付き合いは誰にも言っていないません。そう、いわゆる秘密のお付き合いというやつです。秘密にするには理由があります。演劇部仲間の工藤の存在が気がかりなのです。

彼は僕と同じ大学二年で『演劇部のパラッチ』の異名を持つ男なのです。工藤は自慢のゴツイ一眼レフカメラを首から提げ、日々演劇部のスキャンダルを追っています。いったいなぜ彼が写真部ではなく演劇部に所属しているのか僕には理解できません。

もし工藤に僕らのお付き合いがバレれば、演劇部中、いえ、大学中に僕と竜宮下さんの秘密が白日の下にさらされてしまうことでしょう。

僕と竜宮下さんとしては、静かにひっそりとお付き合いしたいのです。

そのため、僕たちは秘密裏に行動するCIAのごとく落ち合い、この夏祭りにやって来ました。

とはいえ、夏祭りは大学の近くの公園で催されているため、いつ誰に会うかわかりません。しかし幸いなことに、工藤は夏風邪を引いて寝込んでいるという情報を、竜宮下さんが独自の情報網でキャッチ。

そんなこんなで、僕たちは夏祭り会場の公園の門をくぐったのです。

僕たちが公園に着いたのは午後六時頃だったのですが、既にたくさんの方がお祭りを楽しんでいました。露天が軒を連ね、焼きそば、たこ焼き、綿飴、リンゴ飴、などが売られています。浴衣姿の少女少女たちはヨーヨー釣りや金魚すくいに興じています。なんとも心躍る光景に、竜宮下さんはしゃいでした。

公園の中央にある広場では、職人さんたちが打ち上げ花火の準備をしていました。楽しみですね。

僕と竜宮下さんは綿飴を買ってモムモムと食べながら歩いていると、唐突に竜宮下さんが歩みを止めました。それから彼女は嬉々とした声でこう言いました。

「あつ、ニヤンダム！」と。

僕は竜宮下さんの視線の先を見ました。そこには何かのショーができそうなほどの舞台が設置されていて、『第十七回とうもろこし大食い王決定戦』という巨大な看板が掲げられていました。舞台には折りたたみ式の長テーブルと二脚のパイプ椅子が用意され、テーブルの上にはたくさんのとうもろこしが盛られた皿が二つ、それぞれの席に用意されています。

ニヤンダムは舞台の右端の『賞品』と書かれた札が置いてあるテーブルに、悠然と直立しておりました。

ニヤンダムとは、竜宮下さんがこよなく愛するアニメ『機動猫戦士ニヤンダム』の主役ロボットのことです。その六十分の一フィギュアが『第十七回とうもろこし大食い王決定戦』の優勝賞品だったのです。

僕は見逃しませんでした。竜宮下さんが不敵に笑うのを。そして案の定、彼女はこう言いました。

「藤縄くん、ニヤンダムを取ってきなさい」と。

それはつまり「優勝してこい」と言っているのです。

「あい」と僕は答えました。竜宮下さんには敵いません。

「大丈夫、藤縄くんなら勝てるわ。あなたは今日のこの日のために、極貧生活を送り、絶食に近い苦行に耐えてきたのよ」

腹岡さんのママ

決勝戦開始から二十分ほど経ちました。

制限時間三十分なので、残りあと十分。

ここにきて腹岡さんと僕の隠していた実力に差があることが明らかになってきました。

僕のペースはそれほど落ちていません。確実にとうもろこしを一本、また一本と丸裸にしていっています。

ですが対する腹岡さんのペースたるや、落ちるところかむしろ上がっています。彼は人間とは思えぬ形相で「うんめえうんめえ、ぐしゃぐしゃしゃ」ととうもろこし汁を撒き散らしながら食い荒らしています。化け物としか思えません。

これでは熊ゴリラの手にニヤンダムが、と思ったその時、唐突に僕にチャンスがやってきました。

腹岡さんのほうから聴いたことのある音楽が流れてきました。

焼きあがーれっ

焼きあがーれっ

焼きあがーれっ

紅じゃけえ

その曲は竜宮下さんが下手したら僕よりこよなく愛しているアニメ『機動猫戦士ニヤンダム』のオープニングテーマ曲です。

腹岡さんとうもろこしを食べる手を止めて、慌ててスボンのポケットから携帯電話を取り出しました。どうやら彼の携帯電話の着歌のようです。

「もしもし——あつ、ママ！」と腹岡さんはえらくびっくりした様子で言いました。「う、うん。うん……」

これをチャンスと呼ばずして何と呼ぶでしょう。腹岡さんは完全

にとつてもろこしのことを忘れ、ママの話に耳を傾けるばかり。この隙に追い上げ、あわゆくば追い抜かして僕が勝利するのです！

腹岡さんにマザコン疑惑を追求したいお気持ちはわかります。ですが、今はそれどころではありません。それに彼のあの話し方、あの姿はどう見てもマザコン！ 追求するまでもないのです。

僕は腹岡さんの混乱に乗じてとうもろこしを食べ進めました。歯と歯の間に無数のとうもろこしの粒が挟まって変な感じがしますが構っちゃいません。

「うん……わかったよママ。もう少ししたら帰るよ。でも大学生にもなって門限八時は厳しいよお。……うん……うん……だから大学のすぐ近くの公園だつてば。……うん……うん、ごめんつてばあ。すぐ帰るよ……じゃあね」腹岡さんが電話を切りました。

その間に僕は腹岡さんを追い抜きました。

年齢不詳だと思っていた熊ゴリラの彼が大学生でしかも僕と同じ大学らしくしかも門限八時のマザコン王だった、という驚愕の事実が明らかになって気が散って苦労しました。ですが、ここまでくればあとは逃げ切るのみ。勝利の予感を感じずにはられません。

ですがそんな僕を腹岡さんが戦慄させました。

「ママああ！ すぐ帰るよおお！ ぐほほほむしゃしゃしゃ！」

腹岡さんが凄まじい勢いでとうもろこしを食べ始めたのです。そのスピードたるやこれまでの三倍は確実。恐ろしくて直視できません。いったいママに何を言われたのでしょうか。それともママとはそれほどに恐い女性なのでしょうか。

などとママについての考察を続けていては、僕の負けが決まってしまう。

愛しの竜宮下さんのためにも負けられません！

竜宮下さんがこよなく愛するニヤンダムを勝ち取って、僕のことをもっとこよなく愛してもらおうのです！

覚悟しろ、熊ゴリラめ！

コタツ

負けました。

熊コリラこと腹岡さんは、やはり見かけどおりの化け物でした。常時ラマダン状態にあった僕が敵わなかったのです。予想外のママの呪いも敗因でした。

腹岡さんは授与式で、とうもろこし型のトロフィーと六十分のニヤンダムのフィギュアを司会の人から受け取ると「うほうほうほ！」と勝利の雄叫びを上げ、その巨体に似合わない俊敏な動きで舞台から飛び降り、走り去っていきました。おそらくママの下へ帰っていたのでしょう。

敵ながらあっぱれな奴じゃった、と戦国武将のようにコメントしたいところなのですが、敗者の僕にはそんなことを言う資格すらありません。シヨックです。

ですがさらなるシヨックが僕を追い詰めました。

「では続いて、準優勝の藤縄さんに賞品の授与をしたいと思いますー」と司会のおじさんが言いました。

僕は優勝者にしか賞品をくれないもとばかり思っていたので、これ幸い、とその時は思いました。準優勝の品で、竜宮下さんのご機嫌を取ろうという作戦です。

「準優勝の賞品はこちらでーすっ」

司会の人がそう言うのと、舞台裏から一人暮らしサイズのコタツを背負った若い男が登場しました。

「準優勝の品は我が家に代々伝わる秘宝！電気店を営む我が家を数十年に渡って見守った（あるいは売れ残った）コタツでーすっ」
視界のおじさんが言い終わると、若い男が僕の背後に回りこみ、僕の背中にコタツを背負わせました。赤ちゃんをおぶるみたいにコタツを背負っている僕に、観客の人たちがなんとも微妙な視線を送ってきます。たぶん彼らはこう思っているのでしょう。

「夏にコタツなんてねえ」と。

観客だけじゃなく、きつと司会者のおじさんもそう思っているの
でしょう。僕だってそう思います。そしておそらく、竜宮下さんも。

「皆さん、藤縄さんに盛大な拍手をお送りくださーい」

勢いに欠けた拍手がパラパラと僕にぶつかってきました。

僕は観客席の竜宮下さんを直視できず、かくれんぼの鬼のように
きよろきよろとしていました。

最終的に、我々が勝利するのよ

『第十七回とうもろこし大食い王決定戦』から一時間近く経ちました。

僕と竜宮下さんはお祭り会場の隅、木製のベンチが三つ設置されているところにちんまりと座り、ラムネをちびちびと飲んでいました。

ベンチの横にはダンボールに入れられたコタツが立てかけてあります。さすがにそのまま背負って歩くのはお馬鹿さんの極みだと思います、司会者の人に頼んでダンボールを頂き、コタツを折りたたんでぶちこんだ次第です。

それにしても……。

「ニヤンダムが……コタツ。夏に……コタツ」と僕はわけのわからない呟きを発しました。

お祭りの喧騒がやけに遠くに感じられます。生暖かい風が木々の枝を揺らし、サワサワと寂しい音を立てています。

その風で竜宮下さんの髪が乱れ、右頬に髪の毛がかかってしまいました。彼女はそれを優雅な手つきで払い、僕にこう言いました。「藤縄くん、夏にコタツというのも悪くないよ。今から冬に備えるって、働き蟻みたいで素晴らしいと思う。あの腹岡という熊とゴリラを足したような男は、きつと冬に後悔することでしょう。『嗚呼、あの時準優勝してコタツを取っていれば、こんなに寒い思いはしなくて済んだのに』と」

竜宮下さんはそう言うのと、世界で一番魅惑的な笑みを浮かべ、こっぴどく付け加えました。

「最終的に、我々が勝利するのよ」と。

なんて勝気な女性なんでしょう。僕は惚れ直してしまいました。その時、お祭り会場の中央から花火が打ちあがりました。ぽんっぽんっぽんっ、と夜空に赤や黄、緑や橙の色鮮やかな花火が咲き乱

れました。

竜宮下さんは空を仰いで花火に見とれ、僕は花火の光りに照らされる竜宮下さんの横顔に見とれていました。

「藤縄くん、では参りましょうか」と竜宮下さんは言って立ち上がりました。

「どこへ行きますか？ りんご飴でも食べますか」と僕は言いました。

「いや、ちょっと目をつけていたものがあるから、そこへ」

「目をつけていたものとはなんですか？」

「それはね——」

僕は見逃しませんでした。竜宮下さんが不敵に笑うのを。そして案の定、彼女はこんなことを言いました。

「向こうに『第十七回たこやき大食い王決定戦』という大会が催されるらしいの」

竜宮下さんはそう言うや否や、さっさと歩き出してしまいました。慌てて僕はコタツを抱え、彼女を追いました。

お腹の中はとうもろこしでいっぱいです。

コタツを背負って僕は行く

蛇口から水が出るのは、これすなわち水道局の人達が働いている証拠である。有難い。

部屋の明かりが点くのは、これすなわち発電所の人達が働いている証拠である。有難い。

では僕がなぜ大学へと続く長い長い坂道を歩いて登っているのかと言えば、これすなわちスクールバスの運転手が休んでいる証拠である。迷惑千万。学生と同じように、スクールバスの運ちゃんも夏休みとのこと。働くがいい。たとえ学生がいなくとも。

頭上から殺人的としか言いようがない太陽の光りが僕の体を焦がしていく。

「俺はなんだって大道具係なんぞやっているんだ」と僕は独り言を言ってみる。虚しい。

僕は背負っているコタツをどうにか頭上に持ち上げて屋根代わりにできないかと腕に力を入れてみた。

だが、ふんつ、と気合を入れても、腕にはるくに力が入らない。そもそも体勢が良くなかった。

背中に一人暮らしサイズのコタツを乗せ、両腕を背中に回してそのコタツを抱えて背負っているのである。それは力も入るまい。

まあ腰を田植えをする百姓のごとく曲げれば、コタツを即席のビーチパラソルにできなくもないが、それではこの万里の長城のような坂道は登りきれないだろう。途中でくたばってしまうのが関の山だ。

その上僕は背中だけでなく、首にも荷物を括りつけている。正確に言い換えれば、括りつけられた。

コタツを背負ってアパートを出て五分ほど歩いた時に、大家のおばさんと会った。スーパールの帰りらしく、彼女は長ネギと大根が突き出た袋を右手に、左手にはエコバックを提げていた。

大家は唐突にスーパーで買ったばかりのとうもろこしが二本入ったエコバックを僕に差し出した。そして「英輔君、またろくなもん食べてないんでしょう。あげるわ」と言った。

この大家、こんなふうにして時々僕に食料を分け与えてくれる。有難い。

ただ今回はあまり有難いとも言えなかった。

僕がろくなものを食べていないのは事実だし、とうもろこしは非常に魅力的な食料ではあるのだが、いかんせん僕の両腕は塞がっていたからだ。

そこで大家は、俺の首にそのエコバックをかけた。

「ほーら、これで大丈夫でしょ。演劇部の子たちと一緒に食べるといいわ」と大家は満面の笑みで言った。

そんなわけで僕は背中にコタツ、首からはとうもろこしが二本入ったエコバックを提げて、のしのしと重い足取りで大学へと続く坂道を登っている。

顎からはひっきりなしに汗の粒が垂れ、Ｔシャツは着衣水泳でもしたみたいにびっしょり濡れていた。セミが夏を盛り上げんばかりに大合唱を披露している。

つたく、夏に冬の芝居なんかやるでない。

コタツが電源点いてるみたいに熱いじゃないか。

坂道の伝説

僕が所属する演劇部は六月、十月、三月の年三回、定期公演を行っている。まあのんびりとした連中が集まっているので、あまりガツガツと練習したりはしないが。

それでも今度の十月、文化祭での公演に向けて八月から練習をしようということになり、僕はその公演で使うコタツをせっせと運んでいる。

大道具係で且つ大学から一番近い所に住んでいる、という理由で、僕のコタツが一時的に徴集されることとなった。「僕の」とは言っても貰い物だが。

演劇部仲間の藤縄が、夏のお祭の大食い大会で命からがら手に入れたコタツを僕が貰い受けたのだ。

そのコタツの重さと八月の太陽が、僕の体力を容赦なく削っていく。

僕はずっと俯けていた顔を上げてみた。

坂道はまだ延々と続いている。

これはもう卒業した演劇部のOBに聞いた話だが、この辺り一帯は元々は山だったらしいのだ。きつとのどかで野鳥がさえずるような山だったに違いない。

そんな平和な山に突如殴りこみをかけたのが、僕の大学の経営者だ。彼は金にものを大学建設を押し切り、小鳥達の山を崩して削って道路を敷いて、その頂上に僕の大学を建造した。

その山の名残があり、このような坂道が存在しているとのこと。それに家もまばらにしか建っていない。あとは空き地だったり、謎の工場だったり、魅惑のお城だったりするだけだ。どう好意的に見ても東京とは思えん。

道は車がぎりぎりすれ違える程度の広さの道で、センターラインが無いからバスと普通乗用車がすれ違う時にはかなり冷や冷やする。

まあ、今はバスに乗っていないから関係ないが。それに車も滅多に通らない。

遠くに大学の講義棟は見えてはいるのだが、その姿はまだ小さく、陽炎のようにゆらゆらと揺らいでいるような気がする。

まさか厩気楼ではあるまいな、と一瞬危惧したが、サハラ砂漠ならまだしも田舎っばいとはいえ一応東京。厩気楼なんぞあつてたまるか、と思い直し、またえっちらおっちら前へと進む。

あるいは、僕の意識が薄れ始めているせいで、景色が揺らいで見えただのかもしれない。

そして僕は朦朧とする意識の中、ふと、この坂道にまつわる伝説を思い出した。それは何の科学的根拠もないUFOや宇宙人と同じくらい胡散臭いもので、全くもって信じるに値しない下らぬものだった。経験談やら目撃談、その他様々な噂は聞いてはいるが、仮にそれが本当だったとしても、今の僕には関係ないだろう。こんなコタツとうもろこし汗だく男には、無縁の伝説だ。

僕は深い深い溜息をつき、大学の部室棟へ向けて歩みを進める。

これは何の修行ですか？

ジーンズのポケットで携帯電話が震えだしたのは、屋気楼のような講義棟を見てから五分ほど経った時だった。

携帯電話の震え方からいってそれはメールではなく、電話だった。「誰だこんな時に。藤縄か？ 工藤か？ 宮崎さんだったらいいなあ」

だが電話に出ようにも両腕が塞がっているせいで、ポケットから携帯電話を取り出せない。そこで、体勢を少し崩して右に重心を置き、右腕にコタツを委ね、空いた左手でどうにか携帯電話を取り出した。

その間にも携帯電話は震え続け、早く出るよこの野郎と僕を急かす。

不覚にも慌てた僕は、携帯電話を持った手を滑らせてしまった。汗でぬめぬめしていた僕の掌は、氷上並にスリップする危険があったのだ。そして、不幸にもスリップしてしまった僕の携帯電話は、ガッツという鈍い音を立ててアスファルトの地面に落ち、ころころと転がって五メートルほど先で出来立てはやはやの死体のように動かなくなった。

「これはいったい何の修行ですか……」と僕は呟いた。

おのれ小僧

携帯電話が落ちたすぐ右隣には中世の城がそびえ、車一台入れる程度の規模の門が開いていた。いや、正確に言えば中世の城のようなもの。恋仲になった男女が乳繰り合うことだけを目的に建造された夢の城だ。

しかしなんでまた大学の近くにこんなものを建てのだから理解できない。血迷ったとしか言いようがない。

などと夢の城についてあれやこれやと考察を続けている場合ではない、と気付き、僕は五メートル前方で戦闘不能に陥っている携帯電話を救うべく歩き出した。

だが僕の携帯電話を何者かが拾った。

僕は顔を上げて、その何者かを見た。何者かは小学校低学年ほどに見える少年だった。少年は祭会場でも温泉でもないこの場所で、どういうわけか浴衣姿だった。まあ、どんな格好しようとするは自由だ。浴衣だろうがバニーガールだろうがスクール水着だろうがドンと来いというものだ。

少年は夢の城の門の前に突っ立っていた。

「拾ってくれたのか。感謝するよ」と僕は少年に言った。

「……」少年は黙っている。彼の手には僕の携帯電話が握られている。

「少年、その携帯電話は俺のなんだ」僕はそう言つと、手を差し出した。

「……」

「少年——」

「べー」と少年は舌を出し、見事なあかんべーを披露した。

「おのれ小僧……」

木っ端微塵

僕と突如現れた浴衣少年は、五メートルの距離を空けて対峙していた。

少年は僕の携帯電話を人質に、いや電話質にして、ニヤニヤと不気味な笑みを投げかけてくる。可愛げの欠片もありやしない。

僕は携帯電話を取り返すべく、少年に近付く。すると、少年は後退する。

「……」

「……」

僕が一步踏み出す。少年が一步後退する。僕が一步踏み出す。少年が一步後退する。僕が一步後退する。少年が一步踏み出す。そんなことを繰り返した。

僕と少年の距離は一向に縮まらなかった。

「少年、その携帯電話を返してくれないか」

「ベー」

僕は好青年の見本を示すかのように、爽やかに微笑んだ。

あんな品の無いあかんベーごときで怒り心頭しては、この先の人生、幾人もの人間を殴り倒しながら生きていかねばならない。

ここは冷静に、穏便に、スマートに解決せねば。

「少年、さっきは小僧などと言って悪かった。この暑さのせいではないか。さあ、その携帯電話を俺に返そうじゃないか」

「ベー」少年はけらけらと笑い、これまた見事なお尻ぺんぺんをかましたあげく、ぷつ、と屁までこいた。

「おのれ小僧……後悔することになるぞ」僕は怒り心頭した。「俺は大学中の人間に恐れられているほどの武術の使い手だ。血を見る前にとっとその携帯電話を返したほうが身のためだぞ」

もちろんハッターである。武術なんかかじったこともない。

そもそも僕は大学に入学してからと言うもの、煙草を吸い、酒を飲み、ろくな食料にもありつけず常時栄養失調気味に陥り、体力は生きている傍から失われているのだ。僕の細い腕から放たれる鉄拳をくらったところで、ダメージは期待できないだろう。

それを見抜いたのか、少年は涼しい顔をしてけらけらと笑った。よく見れば彼は一滴の汗もかいていなかった。この暑さでは立っているだけで誰だって汗だくになるはずなのに、少年ときたら春の草原にいるかのような佇まいだ。奇怪極まりない。

僕の体力はこうやっている間にも失われていく。コタツの重みが徐々に増えているような気がする。

どうにかせねば、と思ったその時、僕の頭に名案が浮かんた。

「そうだ少年、とうもろこしは好きかな。実は知人からとうもろこしを頂いてね。今、俺が首から提げているエコバックの中に二本入っている。そこで提案だ。このとうもろこしとその携帯電話を交換する、というのはどうだろう」

少年は黙ったまま、じっと僕を見つめていた。女に見つめられるならともかく、お前みたいな糞ガキに見つめられても嬉しくもなんともない、とは思っても言わなかった。

「ほーら、とうもろこしだぞ。美味いぞ」と僕は言って首を振った。エコバックはゆさゆさとゆっくりと揺れた。

少年は僕の巧みな誘惑に負けたらしく、ゆっくりと僕のほうへ歩いてきた。それから彼は僕の首からエコバックを取った。

「よし。じゃあその携帯電話を俺に渡すんだ」

だが少年は僕の言葉が聞こえないのか、空を仰いで耳をほじくった。そして引き返して、再び僕と五メートルの距離を空けて立ち止まった。

「……少年、話が違うぞ」

「……」少年はフルフルと首を振り、携帯電話を地面に置いた。そこは携帯電話が最初に落ちた夢の城の門の前だった。

「おい、俺の手に返すのが筋だろう」と僕が言くと、少年はニツと

笑った。

そして僕は恐ろしいものを見た。休みのはずのスクールバスが、向こうから走ってきたのだ。

少年は道の端に退いた。僕の携帯電話を残して。

どうにか携帯電話を救い出したかったが、時既に遅し。

「あつ——」

スクールバスの巨大なタイヤが、僕の携帯電話を木っ端微塵に粉砕した。

天使現る

スクールバスが走り去っていく。

本来なら、休みではなかったのか運ちゃんよう、とでも言えばいいのだろうが、道に残された携帯電話の残骸を見ては、何の言葉も出てこない。

誰でも絶望的になろう。液晶の破片やら番号ボタンらしきものが散らばっているその様を見れば。

僕には周りの風景が突然、荒涼としたものになってしまったかのように見えた。

そんな絶望に打ちひしがれている僕に、少年が陽気に話しかけた。「お兄さん、これは試練なのさ」と。

僕は見るともなく大破した携帯電話を見ていた。

少年は続ける。

「僕は恋の神様さ。携帯電話はこれから始まるお兄さんの恋の代償だと思ってくれよな。それに、とうもろこしも」少年はそう言うのと、エコバックをゆさゆさと楽しそうに揺らした。

僕はギロリと少年を睨みつけた。

「少年、やっとまともに喋ったと思ったらそんな戯言ほざきやがって――」

「あれ、英輔先輩ですか？」と唐突に、この世のものとは思えぬほどの可愛らしい声が、僕の背中に（正確に言えばコタツに）投げかけられた。

振り向くと、そこには演劇部の後輩、宮崎さんが天使の微笑みを浮かべて立っていた。

「やっぱり英輔先輩だったんですね。コタツを持ってくるって聞いたから、そうじゃないかなって」

宮崎さんの「かなって」という語尾を聞いて、僕は今にも体がとろけそうになった。なんとという可愛らしい「かなって」なのだ、と。

そこらの娘に真似できる芸当ではない。宮崎さんだからこそ可能な超絶技巧なのである。

僕は顔をきりりと引き締めて、宮崎さんに言った。

「そうなんだ。大道具係もなかなか大変なものさ。はっはっは」

「重そうですね。そのコタツ」

「なんのなんの。これくらい。あと五つ重ねても何不自由なく動ける」

「わぁ、凄いですっ」

「ふふふ」

もちろん嘘八百である。あと五つもコタツを重ねて担いだりしたら、僕の腰は呆気なく真っ二つに折れてしまうことだろう。

「先輩、なんですかアレは？」と宮崎さんは言って、とある場所を指差した。そこには大破した僕の携帯電話らしきものが散らばっていた。らしき、となってしまうのは、もはや原形を留めていないからである。

「あれは俺の携帯電話だ。様々な不幸が重なり、ああなってしまうのだ」

「お気の毒に……」と宮崎さんはお悔やみの言葉を述べた。

「いったい誰が俺に電話してきたんだろう。おそらく藤縄か工藤だと思うのだが」

「では私が藤縄さんと工藤さんにお電話しましょう。大事な用事だったら大変です。事件が起きてからでは遅いのです」宮崎さんは緊迫感溢れる表情で携帯電話のボタンを軽快にプッシュした。

「——あ、もしもし。宮崎です。藤縄さんですか？ はい……はい……そうなんですか」

藤縄め。宮崎さんから電話してもらえるなんて、幸せにもほどがある。今頃、宮崎さんの甘い声を聞いてハアハアなどと至福の溜息をついていることだろう。

「わかりました。英輔さんにはそのようにお伝えしておきます。それでは」宮崎さんは電話を切った。

「藤縄のやつはなんて言ってた？」

「藤縄さんは寝坊したとのこと。工藤さんと朝までお酒を飲んで、今の今まで眠っていたらしいです。『俺と工藤は遅れるから、部室で待っててくれ』と仰ってました」

「なんて勝手なやつだ」

「いえ、朝までお酒を飲まなければならない事情があったのかもしれません」

「宮崎さんは優しいのだな」

「いえ、私などまだまだです」

喫茶店？ コーヒー？ 休憩と言えば夢の城ではないのか？

僕の脳内の「？」のことなど露知らず、宮崎さんは続ける。

「では行きましょう先輩。私が背中を、いえ、コタツを押して差し上げます。そうすれば喫茶店まで行くなど、近所の駄菓子屋さんに行くぐらい容易いです」

「そ、そうか。すまない」と僕はぎこちなく言った。

その時、落胆するのはまだ早い、と僕は考えた。喫茶店をきつかけにして、宮崎さんとの親交を深めていき、あわゆくば夢の城へ、と。素晴らしい。

僕は坂を上るため、よいしょよいしょと回れ右をして進むべき方向へと向き直った。

そこに少年の姿はなかった。まあ、宮崎さんの登場ですっかり忘れてしまっていたのだが。

「どうしたんですか？」と宮崎さんは僕に訊いた。

「いや、そこに浴衣姿の少年がいたはずなんだがいなくなってるね。僕が宮崎さんと話している間にどこかへ行ってしまったのだな」

「少年、ですか？ 私が先輩に声をかけた時には誰もいなかったですよ」

「誰も？」僕はびつくりした。

「はい」

僕は少年の戯言を思い出した。『僕は恋の神様さ』と少年は言っていた。

まさか……いやいや、そんなことが。あかんべーでお尻ぺんぺんで尻をこくような糞ガキだったじゃないか。

だがしかし――。

「先輩」と宮崎さんが背後から言った。「ではコタツを押しますよ。二人で喫茶店へ参りましょう」

僕は坂を登り始めた。

一人で歩くよりもずっと楽で、コタツの重さはさっきの半分程度にしかなかった。背中から宮崎さんがコタツを押す力が僕の背中に

伝わってくる。

歩き始めてすぐに首がやけに軽いことに気付いた。そして僕は思い出した。とうもろこしが入ったエコバックを少年にあげたことを。

わかる人にはわかる

撮った写真をスキャナーでPCに取り込む作業は、なんでこうも眠くなるのだろう。やはりその単調さに問題があるのか。世の中に存在するこういった作業的動作は、「何かをしながら」取り組むべきなのかもしれない。そうでないと、「俺は大学に入って何を学んだ?」「俺に彼女ができないのはなぜなんじゃ?」「そもそも人生とはなんぞや?」などの先送りすべきイタイ問題の数々について考え出してしまうからだ。

そんなわけで、俺は好きなロボットアニメ『機動猫戦士ニヤンダム(劇場版)』の音楽をかけながら作業している。

タイ

震える

タイ

それは

新鮮の証

なんて平和で意味のない歌なんだ。そうだ。意味なんぞ求めてはいけない。俺はカメラを持って目の前の風景と部員達のスキャンダルを撮り続けるのだ! そうすればきっと活路は見つかるぜ!俺はここで写真を撮っていてもいいんだ! おめでとう俺、おめでとう俺、おめでとう俺――。

などと自分で自分を祝福しているうちに写真のスキャンが終わり、俺は早速自分のウェブサイトそれをアップした。サイトにアップするのはいつもの演劇部の連中のスキャンダラスな写真ではなく、健康的な風景写真ばかりだ。これは将来写真家になるための布石なのだ。

写真をアップすると、俺は一旦PCから離れ、台所でココアを淹

れた。冬はココアに限るぜ。

ココアをすりながらサイトの掲示板をチェックすると、早速書き込みがあった。

『新しくアップされた写真、早速拝見しました。いつも思うのですが、クドウさんの撮る写真は、どうしてこうも色鮮やかに写るのでしょうか。色合いだけでなく、構図の決め方も素敵です。色鮮やかに写る海からは力強さと切なさが感じられます。次回作も楽しみにしています。モモ子太郎』

わかる人にはわかる、と俺は思った。モモ子太郎さんほどの慧眼の持ち主はそうはいないぜ。

俺はモモ子太郎さんに丁寧な返信のコメントを書き、ココアを飲み干すと、電気ストーブを消して布団の中に潜り込んだ。ストーブを消すと、あつという間に部屋の温度が下がって冷え込んだ。

俺がもぞもぞと布団が温まるのを待っていると、机の上の携帯電話が鳴った。だがメールの着信音だったから無視した。布団の外は極寒の寒さなのだ。南極観測隊のごとく布団の中で寒さに耐えている俺が布団を剥いでまで起き上がるわけがない。大体、布団の中でもぞもぞしている時にメールしてくるなんぞ、ろくなやつじゃねえな。大方、藤縄あたりだろうさ、と俺は見当をつけた。

十秒後、俺は眠りの海へぶくぶくと沈んでいった。

集まる三人

英輔の住むアパート『アナハイツ』は、大学から長く長く続く坂道を下って二、三分歩いたところにある。一応東京なのだが、この辺はまだまだ発展途上で、空き地やら畑が多く点在している。

俺は英輔の部屋のベランダで煙草を吸っていた。部屋は五階だから景色は良いはずだけど、夜になると暗くなって遠くの山も闇の中に姿を消す。見えるとしたらすぐ近くを走る電車やぽつぽつと建っている家々の明かりぐらいだ。

ガラス戸越しに部屋の中を窺うと、ワンルーム六畳の中心で英輔と藤縄がコタツに入ってぬくぬくしている。あいつらは煙草を吸わない。というより嫌悪している。喫煙者はいつもこうやって温かいところから追い出される。

さぶつ。俺もぬくぬくしてえ。

俺は携帯灰皿で煙草をもみ消し、部屋の中に入り、コタツに滑り込んだ。

「工藤さん、なにやら煙草の臭いがするのですが、気のせいでしょうか」と藤縄が言った。

「気のせい気のせい。俺はそんなもん、ちーっともわからんぞい」

「いや、臭う。臭うぞお」と英輔が鼻をくんくんさせながら言った。

「やれやれ、お前らは細かいからいけねえな。もっと俺みたいに寛大になれよ。器を大きく、心を広く、だ」

「工藤さんに言われると腹が立ちますね」

「うつせえ」

「それにしても、コタツはいいものだな」と英輔がミカンの皮を剥きながら言った。

「でしよう？　僕も頑張つてとうもろこしを食べた甲斐がありました。文化祭でもこのコタツは活躍しましたし、大食い大会で優勝しないではなかったです。やはり『最終的に、我々が勝利するのよ』で

すね」

「なんか最後のほうの言い方がおかしくないか。まるで誰かの言葉を引用しているように聞こえるぞ」と俺は言った。

「気のせいですよ。嫌だなあ工藤さん。冗談はそのゴツいカメラだけにしてくださいよ」

「このカメラは冗談なんかじゃねえぞ。いつシャッターチャンスに遭遇してもいいように、俺はいつもこうやって首からカメラを提げてるんだぜ」と俺は言って、カメラを軽く撫でた。

「それにしても、俺と藤縄はやけに夏にコタツに縁があったような気がするのだが」

「それも気のせいですよ、英輔さん」

「それもそうだな、藤縄よ。はっはっは」

「あっはっは」

「はて、そういえば俺達はなぜ今日、ここに集まったのだ？ 今日俺の誕生日だったか？」

「もしかしたら僕の誕生日かもしれないせん」

「お前ら、今日ここに集まった趣旨を完全に忘れてやがったのかよ」と俺は呆れた。

どこのどいつか知らんがやってくれるぜ

「こ、これはっ」と藤縄。

「破廉恥な！」と英輔。

俺は二人に携帯電話の画面を見せていた。画面には一枚の写真が表示されていた。

「ほかにこんなもんも送ってきやがった」俺はそう言うと、次の写真に切り替えた。

「こ、これはっ」と藤縄。

「破廉恥な！」と英輔。

「お前ら、もつと違うこと言えねえのかよ」

「いやあ、驚きましたね」藤縄は頭をぼりぼりと掻いた。「まさか『演劇部のパパラッチ』の異名を持つ工藤さんがパパラッチの被害に遭うとは、これは事件ですね」

藤縄の言うとおり、俺もこれは事件だと思っていた。

一枚目の写真は俺がこの近くの畑からこっそりと、とうもろこし二本を盗み出そうとしている現場を激写されていて、もう一枚は演劇部の部員のスクヤンダルを激写している俺を激写していた。

「これはいつ送られてきたのだ？」と英輔は俺に訊いた。

「昨日の夜だ。寝ようと思ったときに着信があったんだよ。ただ俺は面倒だったからその時は無視したんだ。どうせ藤縄だろうと思うたしな」

「失敬な。僕のメールは常に一大事を知らせるものばかりなのですよ」

俺は藤縄を黙殺して続ける。「で、朝起きてメールを見てみたらその二枚の写真が添付されたメールだったわけだ。まったく、どこのだいつか知らんがやってくれるぜ」

「どこのどいつか知らんが、って、誰だかわからないのか？」

「わからねえ。フリーメールのアドレスだ。でなきゃこんなもん送

「つてこねえよ」

「なるほど。どれ、ちょっと携帯を貸してくれないか」

俺は英輔に携帯を手渡した。

英輔はピポパポと軽快にボタンを押し、送り主のアドレスを表示させた。

『onigashima@xxxxxx.xxxxx』

「このアドレスに心当たりは？」

「ないなあ。見当もつかねえ」

「ふーむ」英輔は腕を組んで難しい顔をして考え始めていた。

「工藤さん、もしかして今日ここに集まったのって、このしょうもない写真を僕らに見せるためですか」

「違う。見せるだけじゃなくて、さらに犯人が誰かを推理してほしいんだ」

「推理ですか？ 僕たちは探偵さんじゃないですよ」

「うつせえ。いいからお前も英輔のように難しい顔をして推理しろ。パパラッチがパパラッチされたなんて、パパラッチの沽券に関わる重大な問題だぜ」

「パパラッチの沽券なんてどうでもいいじゃありませんか」

「いいからお前も推理——」

「そもそも」と英輔が口を挟んだ。「とうもろこし畑から盗みを働くとは、まずそこを反省すべきである」

彼女以外の娘など、芋だ

俺たちは白熱した激論を交わしていた。俺を含め、皆のその表情は真剣そのもの。己の知識を総動員させ、語彙力の限りを尽くし、主張と主張のぶつかり合いは混迷を極める。だが俺たちはその先にある輝かしい未来を信じ、さらに論議に論議を重ねる。はたして『演劇部女子可愛い娘っ子ランキング』明日のミス演劇部は君だ』で勝利する女子は誰なのか。

「やはり宮崎さんが一位だ。彼女以外の娘など、芋だ」

「芋とはまた酷いですね。竜宮下さんが一位です。彼女こそ、ミス演劇部の称号を与えられてしかるべきお方です」

「工藤はどう思う」と英輔が俺に訊いた。

「おめえらは何もわかってねえな。やはり一位は緒仁駕原だろ」

「なんと！ 緒仁駕原ときたか！」

「工藤さん、さてはマゾですね。マゾマゾですね？」

「なんだそりゃ」

「だって工藤さん、緒仁駕原さんと言えばツンデレじゃないかと噂されていますけど、その実態はツンツンじゃないですか。まるでデレる気配がないですよ」

「馬鹿かお前は。そう易々とデレを見せてどうする。奥に秘めてこそデレなんだぜ」

「あまりの奥底に秘めているせいで、当の本人がデレの存在を忘れていたのではないか？」

「そういえば文化祭が終わってから、緒仁駕原を見ていないなあ」

「あれ、なんの話でしたっけ」

「あつ——」

なぜこうも話の脱線は人を心躍らせるんだ？ と俺は思った。コタツの上には演劇部の部員名簿と部員（女子）の全員分の顔写真が並べられていた。

「藤縄が部員名簿を見て『演劇部は女子が多いですねえ。でもやはり竜宮下さんが一番きれいですね』と言ったところから話の流れがおかしくなったんだぞ」

「工藤さん、責任転嫁も甚だしいですよ。たしかに僕はそう言いましたが、それを聞いた工藤さんが『竜宮下さんか。ちよつと待ってる』などと仰って手持ちの秘蔵アルバムから竜宮下さんの写真を出したんじゃないですか。僕は呟いたにすぎません。そもそもそんなアルバムを持ち歩いているなんて、写真部に転部したほうがいいんじゃないませんか」

「写真部なんぞに興味ないわい。俺は孤独な一匹狼なのさ」

「あーそうですか」

「そうだ。英輔が『いいや、宮崎さんのほうがきれいだ』なんて言うから、こんな不毛な議論が始まったんだ」

「何を言うか。たしかに俺はそう言ったが、その後工藤が『宮崎さんか。いや、待てよ。今こそミス演劇部を決める時だ！』などとほざいたのが始まりだったのだぞ。元々俺は犯人は演劇部内にと考えて名簿を出してきたんだ」

「工藤さん、全ての原因はあなたにあります」

「さてはお前らが犯人だな。間違いねえ」

「何を仰いますか」

「俺たちは無実だ。なぜそうなるのだ？」

「今日の集まりの趣旨を忘れ、推理中に話を脱線させる。これはお前らが犯人で、推理させまいとする妨害工作だ。間違いないぜ。さあ、今ならまだ許してやる。俺に頭を下げやがれ！」

「工藤さん、あなたはどこまでお馬鹿さんなんですか」

「藤縄の言うとおりだ。そんなもんは証拠でもなんでもないのだぞ。いいか。さっきも言ったがもう一度言っぞ。これは演劇部の内部犯行と俺は見た。どちらの写真も大学近辺で撮影されたというのがまず一つ。これがもしお前が住む国分寺付近ならまた話は変わってくるがな。もう一つは工藤の日頃の行いだ。お前は常日頃から我々部

員のスキャンダルを追っている。これまでも数々の愚劣極まるスキャンダル写真を公にさらしてきた。つまり、お前にスキャンダルを激写され恨みを持った何者かが、お前の破廉恥な写真を送ってきたのだ。そして俺も藤縄もまだお前にスクープされたことがない。俺達が犯人であるはずがないのだ」

「おのれ。それにしても英輔はさつきから破廉恥破廉恥うるせえな。これのどこが破廉恥なんだ」

「破廉恥ではないか。とうもろこし畑から盗みを働くなんて。大体お前はなんだつてとおもろこしを盗んだのだ？」

「食堂でメシを食う金もなかったんだよ。現像代が高くてさ。それで、と思ったんだが、近くを通りかかったおばさんに怒られて、慌てて逃げた。だから俺は無実だ。あのおもろこしはおばさんが持って帰ったに決まってるぜ」

「まったく、工藤さんはどこまでお馬鹿さんなんですか」

パパラッチ的銃撃戦

俺と藤縄は『アナハイツ』のすぐ近くのスーパーに買出しに行った。

結局、犯人が誰のかはわからなかった。英輔と藤縄はしばらくれるし、ほかの部員を見ても、可愛い娘以外は皆怪しく思えてしまう。推理に行き詰った俺たちは『酒と鍋が必要だ』と判断した。

俺はお菓子売り場で鍋の具になり得そうなものを藤縄が持つ籠に放り込んでいく。マシユマロ、かりんとう、甘納豆、うまい棒（コーンスープ味）、などなど。

「工藤さん、闇鍋にする気ですか？」

「熊やゴリラが入っていないだけマシだと思え」

「それもそうですね。ところで、工藤さん。パパラッチの心得ってなんですか？」

「なんだよいきなり」

「興味が沸いたんです」

「ほほう。俺の弟子になるってか。お前もやっと俺の偉大さに気付いたか。いいだろう。教えてやる。とにかく前方を魚眼レンズのごとく広い視野を持って凝視することだ。ターゲットのわずかな動きもキャッチできるぜ」

「なるほど。後方は見ないのですか？」

「後方なんぞ気にしてどうすんだよ。広い視野をもつて前へ歩いていけば、何も見逃すことはねえ」

「それは違いますね。スタートの時点で後方にターゲットがいた場合は、工藤さんのやり方だと見逃してしまいます。これが工藤さんの弱点なのです」

「あ？ 弱点？」

「後ろをご覧ください」

「何なんだよ」俺は渋々後ろを振り向いた。「あっ——」

鬼のお面をつけた奇妙なやつがカメラを構えていた。鬼のお面、ピンク色の膝まで届く長さのコート、茶色いロングブーツ。鬼のお面以外は普通なのに、お面が全てを歪めていた。そしてレンズは明らかに俺たちのほうへ向いている。

「な、な、な」

「『なんだアイツは？』と仰りたいのでしょうか。僕も同感です。ですが、僕にもあの鬼さんが何者かはわかりません。ただ、僕らが『アナハイツ』を出た時から鬼さんは僕らのあとをつけていました。その間、工藤さんは『丁度いいおっぱいの大きさ』について熱く語ってばかりで後方など――」

「やかましい！ おい、その鬼！」と俺が怒鳴ると、鬼は一目散に逃げ出した。

「この野郎、待ちやがれ！」俺は鬼を追いかけた。

鬼は思いのほか素早い。お面をつけて視界が狭いはずなのに、まるで鼠のようにちよろちよるとスパーの各コーナーを走り抜けた。俺も幼稚園の頃は『チーター工藤』の名をほしいままにし、運動会の駆けっこでは輝かしい成績を残したものだ、大学生になった今となつては運動不足が祟つて『老チーター』と成り果てていた。息切れも必至。おのれ鬼め。むっ――。

鬼は走りつつシャッターを押した。息せき切っている俺を写真に収めているのだ。

「なにくそっ。負けてたまるか！」

俺も首から提げている一眼レフを持ってシャッターを切りまくった。

「この野郎、パパラッチをパパラッチしといてただで済むと思うな。パパラッチされたらパパラッチ、これぞ毒をもつて毒を制す！」

追いかけてこが一転、銃撃戦の様相を呈していた。武器はカメラ。敵の写真に写りこまないように賞品棚の影に隠れ、敵が隙を見せたらすかさず姿を現しシャッターを押す。

俺はもう五度目になるフィルム換えをしていた。その度に鬼がパ

シャパシャと一斉射撃ならぬ一斉写激をしてくる。フィルムじゃあんなふうには無尽蔵にシャッターは切れん。やつめ、デジタル一眼レフを使ってやがる。それに比べてこちらは三十年前のマニュアルカメラ。スペック的にこちらが不利か。

だが！

俺はフィルムを入れて巻き終えると、鬼に向かって特攻をかけた。「カメラの性能の差が、写真のクオリティに影響がないことを教えてやる！」

「待つて！」と鬼が声を上げた。

特攻をかけた俺は思わずつのめって転びそうになった。

「あんたとこんなふうには戦う気はなかったのに」鬼はそう言うとお面を外した。その顔を、俺はついさっき英輔の部屋で見っていた。

明日のパパランチ界は、俺たちの双肩にかかっている！

「五ヶ月ほど前、僕はここで熊ゴリラと壮絶な戦いを繰り広げました。彼は実はマザコンで、門限がなんと八時だったのです。それで僕は――」

俺と藤縄、それに鬼のお面を外した緒仁駕原は大学の近くの公園に来ていた。

本当は緒仁駕原がお面を取ったその場で色々話を訊きたかったが、散々暴れまわったスーパーでは具合が悪いので、俺たちはとつと会計を済ませて外に出て、なんとなくここまで歩いてきてしまったのだ。

藤縄はさっきから夏祭りの思い出を語っている。ほとんど独り言に近い。

夏になるとここは祭りの会場となる。色とりどりの露天に奇妙な大食い大会、それにラストに打ち上げられる花火で、ここらへんでは夏の風物詩として有名だ。

でも冬は悲しいほどに何も無い。ベンチと砂場と錆付いた滑り台があるだけのただっ広い広場に過ぎない。寒風が公園の中を通り過ぎて、俺たちを容赦なく冷やしていく。

さぶつ。

俺は独り言を喋りまくる藤縄を残し、緒仁駕原を連れて公園の隅のベンチに座った。緒仁駕原が少し距離を開けて隣に座る。

ちらりと緒仁駕原を見してみる。ボーイッシュな黒髪にくりんとした瞳。もろ好みだぜ。やはりミス演劇部は緒仁駕原だな。

「なにをジロジロ見てるんだ？」と緒仁駕原が言った。

「いや、別に」

「ふんっ」

藤縄曰く、緒仁駕原はツンツンである。いや、絶対にデレがあるはずだ。もしかするとツンツンデレかもしれない。いやいや、ツン

ツンツンデレぐらいか。いやいやいや、ツンツンツンツン——。

「写真」と緒仁駕原が呟いた。危うく聞き逃しそうになってしまった。

「写真、工藤がウェブにアップした写真……良かったぞ」と緒仁駕原は俯いて言った。

「お、おう。あれ？ 緒仁駕原って俺のサイト知ってるんだ」

「ああ。竜宮下先輩から教えてもらった」

竜宮下さんはなんで俺のサイトを知ってるんだろう、と思ったが、考えても無駄なのでやめた。あの人には独自の情報網があるのだ。

「……いつもお前のサイトの写真を見てた。目を奪われた。普段は誰からも賞賛されないどうでもいい写真を撮っているのに、なぜこつも違う作品がそのカメラから生まれるのだと不思議に思った」

「……そりゃあ褒められてるのか？」

「ファイフティーファイフティー」

「そうかい」

「褒めるけなすはどうでもいい。あたしはあんたがどうやって写真を撮っているのか興味が沸いた。それで——」

「ずっとあとをつけたのか。でもなんでお面なんかつけたんだよ」

「見つかったもあたしだとわからないだろ」

「わからんけど目立つぜ」

「あんたは半年近くあたしに気付かなかっただろ。馬鹿がつ。さっきだつてチビ縄がいなかったらあたしに気付いてなかっただろうが」
「うっ」

ちなみに言うまでもないと思うがチビ縄とは藤縄のことである。

「け、携帯に写真を送ってきたのは？」

「あれは……評価をしてほしかった。あたしのスクープ写真を」
「えっ」

「工藤を追跡してみて、改めてあんたが写真馬鹿だということがわかった。写真に関しては妥協を許さない。そう思ってみると、スキヤンダルな写真も……悪くない」

「だろ！」

「……う、うん」

お、僅かだがデレが出てきたんじゃないのか。

「あたし、工藤……の写真が好きなんだよ」緒仁駕原が恐ろしく聞き取りづらい小さな声で呟いた。

これぞまさしくデレじゃないか！ これで「の写真」がなけりや最高なんだが。

「でもこんなパパラッチ野郎をストーキングするなんて、緒仁駕原さんは世界一の物好きさんですね」

いつのまにか藤縄がベンチの後ろに立っていた。どうやら独り言は終わったらしい。

「俺がパパラッチ野郎なら、緒仁駕原はパパラッチ娘だ。いや、待てよ……」

「そうか！」と俺と緒仁駕原は声をあげた。

「我々で、『夫婦パパラッチ』を結成しよう！」俺はベンチから勢いよく立ち上がった。

「いいとも！」緒仁駕原も立ち上がった。

「緒仁駕原、俺と一緒にいこうぜ！ 明日のパパラッチ界は、俺たちの双肩にかかっている！」

「最強のお馬鹿コンビ誕生ですね」と藤縄が力なく言った。

待ってるぞ、相棒

俺は講義棟三階の窓から望遠レンズを構えていた。狙うは部室棟裏の暗がりにいる演劇部に入っただかりの新生カップル。なにやら親密そうに手を繋いでいる。

「ふふふ、阿呆な新生どもめ。貴様らの痴態は、このカメラに収めたり！」

俺はシャッターを切った。楽勝だぜ。

ゴールデンウィークが明けて三日が経っていた。新生は大学生活にも慣れてきて、じゃあこれから恋人でも狩りにいくか、などと企て、その結果がそこにいる阿呆カップル、というわけだ。この写真は部室のドアに四つ切サイズで貼り付けてやる。

その時、ズボンのポケットの中の携帯電話が震えた。出てみると緒仁駕原からだった。

『工藤、緊急事態だ。すぐ来てくれ』と緒仁駕原が言った。声は緊迫感に満ちていた。これはただ事ではない。

「どうしたんだ？」

『夢の城からチビ縄と竜宮下先輩が出てきたんだ』

「何！？ 藤縄と竜宮下さんが！？ それは演劇部、いや大学中を揺るがす大スキャンダルだぞ！ 俺もすぐ現場に急行する！」

『おう！ 待ってるぞ、相棒』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7162q/>

コイコイコイ

2011年2月24日21時10分発行